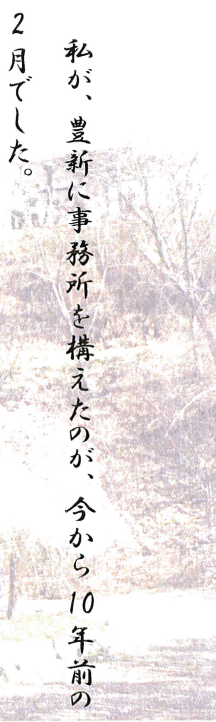


花みずきだより

2014 年 冬号



私が、豊新に事務所を構えたのが、今から10年前の2月でした。

大切な方をなくされたお家の方々のために、心をこめたご葬儀を提供する。お悲しみの中で、大切な方をお送りするお手伝いをしたいと、決して流石作業のようではなく、安心してお任せいただける葬儀をしたいと願い、始めた会社でした。

地域の方々、又、葬儀に携わってくれているさまざまな業者の方々、各方面の皆様にお見守りいただきながら、応援いただき、又、皆様の心に寄り添うご葬儀を試行錯誤しながら過ごしてきた時間でした。

それがもう10年も…

まだまだ、改善しなければいけないこと、社員の教育、勉強しなければならぬことが沢山あります。100人の方がお亡くなりになったら、100通りのご葬儀があるのですから、これでいいということはないのです。

ご葬儀をさせていただいた方々の、ありがとうございます言葉と、花みずきでお世話になってよかったです、その言葉を励みに、これからがんばっていききたいと思えます。

『亡き人へ話しかける』と文字にすると照れ臭いですが、それは誰に教わったものでもない、ごく自然な行為である事がこの仕事に就いて分かりました。最後の対面の際には、ほとんどの方が「良い所へ行ってね」と亡き人のご冥福を言葉にされます。今回はそのお別れの言葉について、印象に残った葬儀の話です。

伝えたい言葉

それはまだ暑さが残る九月の初め頃でした。お電話を頂いたのは、以前当社でご親族の葬儀をさせて頂いた方からでした。その方のご主人が亡くなられ、前回のご縁で今回も当社へ葬儀を依頼して頂きました。病院へお迎えに行き、会館にご安置して打ち合わせをした結果、今回は奥様と息子さんのお二人だけで故人様を送ることとなりました。

当社では、折り紙をご用意しています。裏面に故人様へのメッセージを書いて頂き、それで鶴などを折って最後にお柩に入れて、お別れをしていただくようお願いしています。

口数の少ないこのお二人には、折り紙を作ってもらおう事で少しでも故人様とお別れの助けになればと思い、メッセージの旨を説明してお二人に折り紙を渡しました。

葬儀当日、お部屋に伺うとお二人は折鶴などを作っておられました。出来上がったその折り紙を預かったところ、表側に書いてある一つのメッセージが目に留まりました。

『健康になりますように』

(願い事を書くためのものではないのだけど…)と内心思いながら、私はそれを預かりました。そうして定刻になり、お寺様によるご読経が始まりました。故人様とご家族とお寺様だけの式場はとても静かで、ご読経の音がよく響きました。

お寺様のご読経を終えて退出されると、故人様と最後のお別れをしようため、式場の中央にお柩を移動して、蓋を開けました。奥様と息子様にお供えの花を手向けてもらい、最後に預かっていた折り紙を渡し、お二人にお柩に納めてもらいました。

その時、奥様が涙を浮かべながら故人様に向けて言われた言葉は忘れられません。

「あつちで元気な体になってね」

この言葉を聞いた瞬間、私の中に電流が走りました。折り紙のメッセージをその時初めて理解できたのです。

この故人様は『筋ジストロフィー』という難病にかかり、10年以上闘病生活を続けておられました。これは亡くなられた時に発行される死亡診断書に書かれている事なので、最初の打ち合わせの段階で私も知っていました。ただしその言葉を聞くまで、すっかり頭から抜けていたのです。

あのメッセージは間違いなく故人様に向けられたものでした。最初に私が想像したような、奥様がご自身の健康を願ったものではありませんでした。つらい闘病生活を傍で支えて、一緒に苦しんできた奥様が心の底から故人様のために願ったものだったのです。

私は自分の浅慮を恥じました。素朴な言葉の内に、これだけの想いが込められていたのです。

葬儀ではその規模に関わらず、ご遺族、特に喪主になられる方には多くの事を決めて頂く必要があります。そして忙しくしている間は悲しみに直面せず済みますが、いざ葬儀を終えお骨となった故人様と向き合った時、激しい喪失感に襲われるというケースもあります。本来お別れの場である葬儀で故人様との対話に集中できるかは、その後の気持ちの整理にも影響を及ぼすと考えられています。

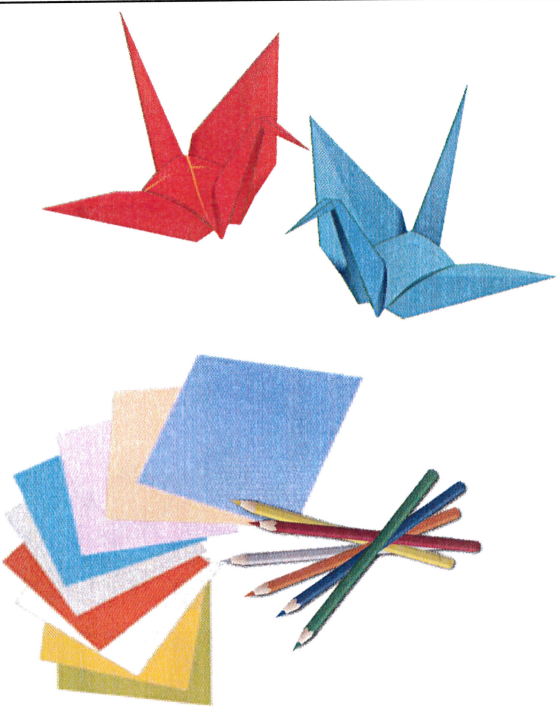
葬儀社の役目は葬具を用意するだけでなく、ご遺族がお別れに集中できるように雑務を代行し、適切なアドバイスをする事だと思います。その上でどれだけ自然に、ご遺族が感情を出せるようお手伝いできるかが現在の葬儀スタッフに求められる資質だと考えます。

今回の件は私自身が葬儀の本質を踏まえ、奥様のメッセージを曲解しただけの話ではありません。しかしこの事で改めてご遺族の気持ちをよく考える事の大切さ、折り紙という故人様への手紙を書いてもらう事の意義を見直す機会となりました。

今後も葬儀の本質を見失わず、ご遺族の悲しみを支えられるよう努力していく所存です。

最後になりましたが死後の世界というものがあるかは誰にも分かりませんが、ましてそこに健康という概念があるかも分かりません。

ですがこの奥様の純粋な願いは、きっと故人様に届いていると信じます。



花みずきだより

気まぐれんせい 花みずき会館おくりびとのおすすめ

「たまに読むならこんな本」

『四十九日のレシピ』 伊吹有喜・著 (ポプラ文庫)



伊吹有喜

今年初めに女優の淡路恵子さんが逝去されたのは、まだ皆さんの記憶に新しい事かと思えます。葬儀は東京の青山葬儀所で営まれたが、参列は百五十名程のひっそりとした形だったそうです。往年の名女優の葬儀としてはいささか寂しい気もしますが、これも時代の流れでしょうか。

その淡路さんの遺作となった映画『四十九日のレシピ』が先日まで上映されていきました。この映画はNHKでも以前ドラマ化されておりましたが、ご存知の方もいらっしゃるかと思えます。私自身は未見ですが、ドラマ版は主人公の熱田良平役が伊東四朗さん、もう一人の主人公である遠藤百合子役が和久井映見さんとこちらも味のある配役です。機会があれば映画、ドラマのどちらも見てみたいと思っています。

それらの原作にあたる小説が本屋さんにあつたので、まずそちらからと購入しました。職業柄この作品のタイトルに興味を持った所も大きいのですが、実際に読んでみてその内容に驚きました。

物語は長年連れ添った妻を亡くしたばかりの男、熱田良平のもとに奇妙な客が訪れるところから始まります。井本と名乗るその少女は、亡き妻である乙美の弟子を自称し、生前に乙美から四十九日までの間の良平の身の回りの世話を頼まれたと告げます。ギャルファッションに身を包んだ井本の遠慮ない言動に、食事や入浴の意思すら失せていた良平も少しずつ気力を取り戻します。体臭を指摘されシャワーを浴びようとすると、背中を流すと躊躇なく下着姿になる井本に動転する良平。そこに結婚して東京に住んでいたはずの娘、百合子が帰ってきて一悶着になります。

こうして奇妙なお手伝いさんをお交え、乙美の遺志である四十九日の大宴会に向けて無気力だった良平が動き出します。それと並行して東京で心に深い傷を負った百合子も、その傷と向き合い立ち直るために歩き出します。

その結末は若干幻想的な向きはありますが、一気に読ませるだけの勢いと物語性には、読み終えた後の心地よさがありました。

欧米では死別の悲嘆をグリーフと呼び、その悲しみから立ち直るまでの心の変化の研究が進んでいます。研究では葬儀などですっきりと悲しむ事も大切な事とされ、それが後に気持ちを整理する事に繋がると考えられています。日本でも四十九日までの間は線香ロウソクを絶やさないと言われていますが、これも死別の悲嘆から立ち直るため、大切な人の死と向き合う作業とも言えます。

愛情が深いほど別れの悲しみも深く、時としてその悲しみが身体へ悪影響を与える事もあります。また周囲から見たら普通ではないと思える遺族の行動も、本人にとっては悲嘆から立ち直るために必要な行動である事もあります。この物語では良平という人物を通し、悲しみと向き合う作業の重要性と、周囲の人が遺族の悲しみを理解し支える事の必要性が、葬儀に携わる者の視点から垣間見えました。ご興味のある方は是非一度お読み頂ければと思います。

なお冒頭の映画ですが、淡路恵子さんはお節介な伯母の珠子役で出演されています。まだ見えていませんが、きっと良い演技をされている事だと思いますので、是非チェックしてみてください。

「終活」で一番大切にしてほしいこと

先日、近所のファミレスで食事をしていた時、隣の席の女性グループの会話の中から「エンディングノート」という言葉が飛び出してくるのを耳にする機会がありました。日常の会話の中で「エンディングノート」という言葉をしかかも、40代ぐらいの女性グループから聞くなんてちよつと意外だったので、思わず耳をそばだててしまいました。

お話を直接伺ったわけではないので、あくまでも推測なのですが、話の中心だった女性は、どうやら最近お父様を失くされて、その時のお葬式で何かしら後悔を残されてしまった様子でした。「だから、母のエンディングノートを書いておかん」と。その方は、自分の最後の為ではなく、大切な方を送る立場としてエンディングノートを使うつもりの方でした。「まあ、結局、母にいろいろ聞いてそれをノートに写すだけなんやけど、葬式に誰を呼んで欲しいかなんてわからんし、葬式の時には本人の希望は聞けないやん。家族葬でも料理とかで結構お金かかるし」。お話は、お式の実体験を基にかなり具体的な内容で、お父様の葬儀で何かよっぽどの事があつたのだろうと感じさせるものでした。

人生の最期を考えるノートをきっかけにして、家族がお互いの想いを伝えあうことは、とても素晴らしい事です。これこそが、本来の「終活」の目的なのだと思います。お別れなんてできれば、何十年も先に延ばしたい悲しい出来事ですから、考えないようにしておきたいはずなのに、この女性とお母様は、いつか迎えるお別れの時のことをかなり具体的に話しあっています。お別れの場に臨んだ時、おそらく、お二人は悔いを残すことはないでしょう。とっても大事なことなのに、話し合うきっかけが中々見つからない。ファミレスの隣の席で、熱っぽく話をする女性が見つかんだきっかけは、「お葬式での後悔」でした。

女性がどういった経緯でノートの存在を知ったのかはわかりませんが、もし亡くなったお父様が、「終活」や「エンディングノート」の事をご存じだったとしたら、残される家族に残る思いは、もっと違った



カタチであったかもしれないかもしれません。「自分はまだ、先...」心のどこかでそう考えている自分がいます。いきおいどんな天災がきても、自分だけは生き残るのではないかと考えてしまふほど、人は自分が亡くなることをイメージできません。終活が大事とわかっていても、心が動かない理由のひとつと言えるでしょう。でも、もし自分が準備することで、家族に良い思い出を残すことができるとしたら...やっておいて損はないような気がします。

大事なのは、とりあえず家族で話をするきっかけを作ること。以心伝心の親しい間柄であっても、話してみても初めてわかることは沢山あるはずですよ。

花みずき会館では、本年度も引き続き、「終活セミナー」を開催いたします。

第1回 「自分で行う終活と家族で行う終活」

- ・終活ってなに? セカンドライフをどう計画するのか
- ・後悔しないための準備とは・終活ノートの活用法
- ・まごころ弁当 (高齢者向け配食サービス) 試食会
- ・関西大学文化会落語大学公演 (予定)
- ・予定日時 4月末頃 10時から12時

花みずき会館 2階 特設会場

入場無料 事前予約制 定員30名

ご希望の方はお電話にてお申し込みください

3月29日フリーマーケット

5月18日人形・写真供養

開催決定

詳細は、ホームページのイベント情報や新聞の折り込みチラシで後日発表していきます。

最後までお読み頂き、ありがとうございます。今後皆様役に立つ情報を提供するために、ご意見やご感想をお待ちしております。 スタッフ一同